弱音ハクの憂鬱

Ａｒｃ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
弱音ハクの憂鬱

【Nコード】
N5796M

【作者名】
Arc

【あらすじ】
【弱音ハク】が主人公の二次創作小説です。

日々なんとなく過ぎていく時間。
ただただ生きていく毎日。
彼女はそんな日常に嫌気を感じていた。
ある日酒場で酔いつぶれた彼女は、多くの人間の想いが交錯する街の中で一人の女性と出会った。
その時、忘れていた『時間』が動き出す。

初投稿作品！

さっと読める短編となっております！

ボーカロイドを愛する人に、是非読んでもらいたいと思っています！

※注意！

8月9日にハクの日記念として某動画サイトにて投稿されました『探偵弱音ハクの憂鬱』及び作者の『オワタP』様とは何の関係もありません！タイトルが被っただけです！

大好きですけど！応援してますけど！！

☆001

「…………、」

そこには一人の女がいた。

腰まで伸びた長い銀の髪をリボンで結わえて垂らした、二十代半ばくらいの女性。
化粧はせず、良く言えばさっぱり、悪く言えば女らしさの欠けた……それでいて端整な顔立ち。
女性はスタイルも良かった。
出るところは出て締まるところは締められた、完璧なモデル体型。
あともうすこしお洒落に気を遣っていれば、世界中の男が魅了されるだろう。
だが、彼女に声をかける男などいなかった。
客引きですらも、彼女のことを避けるようにして離れていく。
なぜ？
答えは一つ。
彼女は病んでいた。

「……つまらない」

彼女の名前は『弱音ハク』。
本名ではない。
いわば芸能活動をする上での芸名だ。
それですら、彼女が自分の意思で望んで付けた名前ではない。
『弱音を吐く』という文章に直結する卑屈な名前。
低迷する彼女の活躍具合を誰かがあざ笑って勝手に付けたあだ名だ。
もちろん最初は反発していたが、そう呼ばれ続けるにつれて慣れ―

自分はそんな名前で呼ばれるのが相応しい人間なんだ、と。
――いや、諦めてしまったのだ。

「……はぁ」

重い重い溜め息をつくハク。
そんな彼女は、今繁華街の表通りを歩いていた。
見渡せば、学校から帰る学生達や、仕事終わりに同僚を誘って飲み屋に行こうかというサラリーマン達の賑やかな姿。
その中、彼女だけが暗く沈んだ――灰色の空間を作り出していた。
がやがやという雑踏から逃れるように、灰色の空間を増殖させていくハク。

「鬱陶しい音……」

ハクは呟く。
血のような赤い瞳。
空ろなその瞳は、ビルの壁面に設置された巨大モニターを捉えていた。
そこに映るのは、一人の少女。
スピーカーから流れるのは、歌声。

『初音ミク』。

十七歳にして世界の誰もが認めるスーパースターに君臨した、紛れも無いトップアイドル。
今や『初音ミク』の事を知らないものはいないし、歌を聴かないものもいない。
ミクの声。
ミクの姿。

ミクの仕草。
誰もがミク、ミク、ミク。
聴く歌聴く歌、全てミク。

「…………ぐっ、」

楽しそうな歌が耳に入るたび、ハクはだんだん気分が悪くなっていくのを感じた。
彼女には「歌」に対して異常なまでのコンプレックスがある。
無理も無い。
彼女も、モニターの中で踊る少女と同じ舞台に立っていたはずの、アイドルの一人なのだから。

☆002

……………

歌いたくても歌えない。
彼女の唄はひどく不安定で、ひどく悲壮で。
明るく快活に歌う「少女」とは対照的に。
歌いたくても曲が無い。
彼女の詩はひどく退廃的で、ひどく閉鎖的で。
聞くものを惹き付ける「少女」とはあまりに程遠く。

彼女はシンガーソングライター。
一人で曲を作り一人で演奏し一人で歌う。
それが一番楽だと思っていた。
誰にも縛られずに自由にやっていける職業だと思って……思いたかった。
それに、いちいちマネージャーやプロデューサーの意向に沿った曲を歌わなければいけない事は、彼女のプライドが許さなかった。

(……浅はかで、愚か)

ハクは自嘲する。
考えが甘かった、と。
全ての負担がそのまま直接自分のみに降り掛かってくるという現実に気付いたのは、かなりの時間が経過してからのことだった。
本来の彼女は人より二倍も三倍も頑張る努力家なのだが、それが災いし……、投げ出したくなるような「何か」が起きても、「まだ頑張れる」と自分を励まし続け――――結果、逃げ場のないと

ころまで自分を追い込んでしまったのだ。
いまさら引き返せないボロボロの、空っぽの状態になってしまったが故に……ハクは今夢遊病患者のように街をうろついている。

「…………ッ」

嫌な事を思い出して、ぎりぎりと歯噛みするハク。
眉間に力が集まり、牙を剥くようにして吊りあがる唇。
その顔はまさに鬼の形相といった様子で、向かいから歩いてくる不良風の男が驚いて思わず道を開けるほどだった。

「……はぁ」

また、溜め息。
自分は何をやっているんだろう、と思い、急に脱力する。

（こんな時は、早くあの店に行くとしよう……）

初音という雑音にまみれた街から早く逃げ出したくて、表通りから外れ、ビルとビルの間に――無音へと消えていく弱音。
彼女は、その先にある小さな酒場へと向かっていた。

☆003

……………

バー『Ｂｒｕｅ☆Ｔｉｒｅｄ』。
ハクの行きつけの、小さな小さな場末の酒場。
別に愛着があるわけではないのだが、彼女は何か嫌なことがあるたびにここへ来ようとひそかに決めているらしい。

「まだ電球壊れたまんま……」

チカチカと目障りな点滅を繰り返す電光看板を見てハクは呟く。
大して客も来ない寂れた雰囲気を、より増長させているに違いない。
こんなところへ毎度毎度来てしまう自分も自分だが、とハクはまた自嘲する。
店の前にいても仕方が無いので、とりあえずハクは店内に入ることにした。

キィ…………カチャ。

壊れかけの薄い扉が開いて、店内の様子が分かる。
店内はやけに薄暗かった。
停電中にぼそぼそと頼りないろうそくを灯しているようなものだろう。
それもそのはず、天井に取り付けられた電球はそのうちの半数ほどしかその役目を果たしていなかった。
表の電光看板と同じく、ここでも電気代をケチっているらしい。
そして、非常に狭い。

カウンター席以外に座るところはなく、ダーツやビリヤードなどの遊戯道具も無い。
本当に、ただ酒を飲んで一人しかいない店員と下らない話をするためだけの場所なのだ。
それでも結構定期的に訪れている辺り、ハクは（自覚してはいない内心の方で）この場所が気に入っていた。
その狭い店内に、青年のものと思われる――それにしては少々高い、声が響く。

「いらっしゃーい……ああ、ハクさん、どうも今晩は。お久しぶり……って程でもないか。ハクさんが前ここに来たのって、つい先週くらいのことだし」

カウンターの向こうでハクに話しかけるのは、このバーたった一人のバーテンダーにしてマスターの男だった。
短い青髪に、どこまでも爽やかな、目鼻立ちのはっきりした顔つき。見た目「だけ」で考えるならば、理想のお兄さん像のランキング上位に必ず居座っていることだろう。
居座っているという表現には理由がある。
この青年、根はお人好しで他人への気配りを欠かさないのだが……。お世辞にも要領の良いタイプとは言いがたく、それなのに他人に深く関わっていくのが好きなのだ。
それゆえ、人に何かしてあげようとする場合には必ず何らかのドジを踏んでお節介扱いされる。

「ら～らら～ら、ら～ら～ら～♪」

青年は今、お客さんのために何か出来ることはないかと思ってグラスを磨いているところだ。
美青年がにこやかな顔でグラスを磨いている姿はそれだけ見れば様

になっているのだが、やはり一つ抜けている。
磨き終わって食器棚にしまう際、タオルを持っていない方の手で直にグラスを握っているのだ。
これでは一体何のためにグラスを磨いているのだろうか、わかったものではない。

「あ～ぁ～←心を込めてグラスを磨く～→お客様は神様～♪」

そして、男は音痴だった。
自作のものと思われるメロディーは所々途切れていて統一性がなく、音程はものの見事に全てはずしている。

「…………、」

ハクは耳栓代わりのヘッドホンを深く深くかぶりなおす。
男の歌が聞こえる限り、彼女はそれを外すまいと固く決意していた。
しかし青年が何か言いたそうにしているのを見て、そろそろとヘッドホンを外して首にぶら下げるハク。

「ダメですよー、いつまでもこんなところに入り浸ってちゃぁ。早く良い人見つけないとー。ハクさんてばすっごい美人なんだから、その気になれば玉の輿だって乗れちゃうでしょ？」

青年はあくまでも悪意の無い爽やかな笑顔で、
繁華街から外れた裏路地にあるような「こんなところ」にある酒場に相応しいセリフをハクに掛ける。
もう一度言う。
この男はお世辞にも要領の良いタイプとは言いがたく、それなのに他人に深く関わっていくのが好きなのだ。

それゆえ、人に何かしてあげようとする場合には必ず何らかのドジを踏んでお節介扱いされる。
美人と褒められてハクは少々赤面したのだが、すぐに銀色の前髪を顔の前に散らして、

「…………ッ！
大きなお世話よ……」

マスターからぷいと目を逸らしてしまう。
元々鈍感な上に店内が暗いのも手伝って、男はハクの感情の起伏に気が付かなかった。
そのままの無邪気な笑顔で男は続ける。

「あ、そうだ！
僕なんてどうですか？
年上のお姉さんって、結構僕の好みのタイプだし♪
ね、ね、僕とハクさんとで、この店を盛り上げていくってのはどう――」

「冗談はこの暗～い照明と先行きを改善してから言ってくれないかしら」

「――うぅ、そうします…………」

今度は体ごと完全に顔を向こう側へ向けてしまうハク。
それを見て、さすがの青年もしょんぼりとした表情でうつむく。
ハクはなんとなく、溜め息をつく。

「……はぁ」

「あー、また溜め息ついてるー。
いけませんよ〜？
幸せが逃げて行っちゃうんですから〜」
その姿を見て、またハクに要らない気遣いをする青年。
……もう一度言う。
この男はお世辞にも要領の良いタイプとは言いがたく、それなのに他人に深く関わっていくのが好きなのだ。
それゆえ、人に何かしてあげようとする場合には必ず何らかのドジを踏んでお節介扱いされる。
現に、今もハクはその言葉をお節介扱いして、皮肉を込めたそっけない返事をする。
「幸せが逃げたから、看板の電球一つ買い換えられないような『こんな』場末のバーに居るのよ、私は」
「———あぅ、いじわるだぁ…………」
しょんぼり顔から更に発展して、目を潤ませた半泣きの表情になる青年。
「……まあ良いわ。
それより『カイト』、いつものアレもらえないかしら、ア・レ」
バーのマスター、青髪の男の名は『カイト』というらしい。
カイトはさっきの泣き顔からさらに変化してぷっくらと頬を膨らせた怒り顔になって言う。
「だーかーらー、僕のことは『マスター』と呼んで下さいっていつも言ってるじゃないですか〜！

じゃないと雰囲気が出ないというか威厳が損なわれるというかいろい――――」

カウンターから身を乗り出して抗議するカイト。
そこでおもむろに、ハクはカイトに急接近する。
吐息の掛かる距離まで。
カイトが身を乗り出すのと同じようにカウンターに手をつき上半身を預ける。
そして妖しい笑みを浮かべながら、こう言う。

「――――あら、互いを名前で呼び合うほど親密な関係だと思っていたのは、私だけだったのかしら」

ハク本人にその自覚は無かったのだが、前屈みになったその体勢は彼女の豊満な胸をまざまざとカイトに見せ付けていた。
意味深なハクの言葉以上にその光景のせいで、耳まで真っ赤になるカイト。

「――――えぇっ！？！？

あ、いや、それはその……っ！！」

「冗談を真に受けないで頂戴」

「……か、からかわないで下さいよぉ～っ！」

「……はぁ（冗談じゃなければ良いのに）」

☆004

ハクの行動に驚いてばかりいたカイトは、ハクが何気なく呟いた一言に気が付かなかった。
気付かずにそのまま、とぼとぼと店の奥に向かってアルコール類の入った戸棚を開くカイト。
そこから取り出した一本を、ハクの前まで持ってきて栓を空ける。

「……はい、いつもの――『漢大吟嬢』です……」

「ありがとう。
やっぱりいつも置いてくれてあるのね」

「そりゃぁ、こんな濃ゆ～いタイプのお酒飲むのは三十四十のおじさんくらいですから……」

「大きなお世話よ」

ごん。
ハクがグラスの底を使ってカイトの額を小突いた音だった。
患部を抑えてうずくまるカイト。

「はぁ……」

ごくり、と一口を胃に流し込んで、また溜め息をつくハク。
最初の一口だというのに、ハクの頬はもう既に赤く染まろうかとしているところだった。

「……ハクさんお酒に弱いくせにキッツイのばっかり飲むから……」

額をさすりながらも、ハクの事を心配するカイト。
実際、ハクはあまり酒に強いほうではなく……いや、はっきり言ってかなり弱かった。
しかしカイトのお節介が気に障ったのか、グラスについであった酒を強引に一気飲みするハク。

「あぁ～、だっ、だめですよそんなにいっぺんに飲んじゃぁ～っ！！」

「うっ、くっ…………………。
……げほ、げほっ！！
お、大きなお世話、よ……」

突然、ハクの火照った顔がカイトの視界から消える。
がたん！！
大きな音――――椅子が倒れた音が店内に響いて、彼はハクが倒れたことを悟った。

「ハクっ！！」

急を要する事態だと判断し、裏へ回る時間すら惜しかったカイトはカウンターを飛び越える。
彼はひどく慌てた様子で、酔いつぶれ地に伏すハクを抱き起こす。

「ハクさん、大丈夫ですかっ？！
しっかりして下さい！！」

ハクの肩を強く揺するカイト。

ハクの様子は目に見えて悪く、既に意識がほとんど無いことはすぐに分かった。
そして何より。

「…………っぅ、うぅ…………。
……っく、うぅぅ…………」

（……泣いてる？）

彼女のうめき声は、悲壮な泣き声のように聞こえた。
なんとなくこれ以上刺激してはならないような気がして、とりあえずカイトは彼女を安静にしてやることにした。
彼はまず、カウンターの上に散らばっていたメニュー表やらグラスやら余計なものをどける。
そしてとても力のありそうには見えない細腕でハクの体を抱え上げ、空いたカウンターへ彼女の体を横たえる。

「ハク…………」

にわかに静寂を取り戻した店内に、カイトの呟きだけが空しく響いた。

☆００５

………………

「…………っつぅ、……あれ、わた……し…………？」

激しい頭痛に、目を覚ますハク。
何故自分は今、バー『Ｂｒｕｅ☆Ｔｉｒｅｄ』の――それも、カウンターの上で寝そべってなど居るのか？
意識を失う瞬間の記憶すら定かでないほどぼやけた頭を、なんとか整理しようと声を出す。

「ハクさん！
……良かった、気が付きましたか。
すみません、せめてソファをベッド代わりに……と思ったんですが、そのソファもかなり埃っぽくてなんだか忍びなかったので……」
ハクのすぐ目の前には見慣れた青年……カイトの姿があった。
彼の表情には、強い安堵の色が現れていた。
ずっとハクの傍にいて介抱していたのだろう、彼女が目を覚ました途端、カイトは安心の意味を込めた溜め息をついた。
「構わないわ……こっちこそ、営業スペースを陣取ってしまったし……。
…………私、またつぶれてたのね。

みっともないったらありゃしないわ……」

「……その。
……レコーディング、とか、上手くいかなかったんですか。
また……、あっ」

『また』と続けたことを、しまった、とばかりに途中で言葉を切り口を手で覆うカイト。

「……良いのよ、本当のことだから。
今回は、作曲の時点で既に良い歌ができなかったの。
最悪よね、自分でもダメだって分かってる曲でも、期限が来れば絶対プロデューサーに聞かせなきゃならなくて。
それでもやっぱりダメだったから……それを最後まで聴かないまま突っ返される、なんて……」

「……ハクさんが悪いんじゃありません。
ノルマだとかプレッシャーだとか、余計なものを押し付ける経営者の方が悪いんです」

辛らつな面持ちでハクを説得しようとするカイト。
しかしその気遣いはまたもや裏目に出たようで、ハクはだんだん肩を震わせ……感情の制御が利かなくなっていく。

「慰めなんて……欲しくないわっ。
私はいつだってそう、他人の目を気にして、その期待に沿おうとして！
ダメだってわかったのにまだ凝りもせずにっ！！」

「そんな事言わないで下さい！！

本当はあなたの曲は―――！！」

「黙ってて！！！」

ガラン！！

からからから…………

カイトが、飲み水用にとハクのすぐ傍においてあったグラス。

そのグラスが、ハクに叩かれて床に転がる。

肩をビク！とすくませるカイトは、転がったグラスの行方を目で追うくらいしか出来なかった。

「…………ぁ、」

「…………ごめんなさい。

今日は本格的にどうかしてるわ、私……。

グラスに傷が入ってるかもしれない、その分も含めてお金は払うわ」

「いえ、そんなの気にしないで下さい……。

壊れても問題ないような、安物のグラスですし……。

お代も、今日はいいです。

僕からのサービス、ってことで……」

「……本当に、ごめんなさい。

それじゃ……」

かちゃ、ぱたん…………………

「…………、」

謝罪の言葉だけ言い残すと、ハクはすたすたと足早に店を出て行ってしまった。
あとには、一人の青年と淋しい静寂が取り残されるのみ。

☆006

…………………

「………………はぁ」

誰にも聞こえない、大きな大きな溜め息をつくハク。

色とりどりのネオンサイン、道行く人々……それら全ての、灰色一色に染まった誰かが。

「……つまんない」

雑踏、雑灯、雑答。

聞こえているのに見えているのに明らかなのに、ぼやけている何かが。

「つまんない……っ」

そして何より、こんな風にしか生きていくことが出来ない自分が。

「つまんないよぉ…………っ！！」

彼女はそれら全てに、『ツマンナイ』という弱音を吐き続けた。

本当につまらないのは他人？世界？神様？
それとも自分自身？
答えを出すことすら躊躇われる自煩自藤。
無限の解を持つようで、一度解いてしまえば一つの価値観しか見出せなくなる矮小な憐律法定式。

「うぅぅ…………………ぅあぁぁぁぁあぁぁぁっっ！！！！」

やがて彼女は一つの解に至った。
何度も何度も繰り返してきた工程、その結果。
ハクは、自分の中で溜めてきた負の感情をいっぺんに吐き出した。
周りの目も知らず、泣いて泣いて泣きじゃくった。
届かないと知りながら、喚いて喚いて喚き散らした。

「うわぁぁぁぁぁ、あああぁぁぁぁんっっ！！！」

子どものように大声で泣き続けるハク。
大きな目から、それ以上に大きな涙の粒が零れ落ちる。
ウサギのそれのように赤い瞳を更に更に赤く染めていく。
本物の子どもと同じくいつまでも続くかと思われたその泣き声は——
——

「もうっ、しっかりしなさいよアンタ！！」

突然、一人の女性によって強制的に中断された。
ハクの両肩を強く掴んで、崩れ落ちたハクを力ずくで立ち上がらせる女性。

「————っ！？」

ハクはその女性に見覚えがなかった。
自分よりも少しばかり高いスラリと伸びた身長。
歳はハクとほぼ同年齢だろうか。
短くスポーティにカットされたブラウンの髪、ハクとは違い丁寧に化粧の施された美しい顔。
それにも劣らない、強い意志を秘めた真っ直ぐな瞳。
露出度の高い赤いドレスに身を包む女性は、ハクの記憶の中に残っているどの人物とも一致しなかった。

「ほら、しゃきっとする！！
酒場かなんかで飲んだくれてたんでしょ！？
自分の家が何処かは覚えてるわね？！」

ハクの混乱も全く意に介せず、次々と質問をぶつける目の前の赤い女性。
戸惑いつつも、なんとかその質問に答えていく。

「……う、っく…………。
はい、一応……」

「よしわかった！
アタシが付き添ってあげるから、そこまで案内しなさい！」

赤い女性はまたも強引に、ハクを彼女の自宅まで連れて行こうとする。
ハクはまさかそんな風に声を掛けてくる人間がいるだなんて思っていなかった。
心配してもらって少し嬉しい反面……それがどうしようもなく申し訳なかった。
反射的に、女性の厚意を跳ね除けようとしてしまうハク。

「……か、構わないで下さい…………。
一人で………ひっく、帰れます…………うっく、から…………
…」

「何言ってんのよ！
こんなフラフラした危なっかしい奴、一人で家に帰せるわけないでしょ！？
人に心配してもらってるんだから、大人しく受け取っときゃ良いの
！」

どこまでも女性は強引だった。
そうこうしている間にも、女性はハクの腕を掴んで無理矢理歩き出してしまう。

コツコツコツコツ！
ずるずるずる…………

ハクを連れて歩く女性に、彼女に引き摺られるようにして歩くハク。

「あ、あの…………っ！」

「何っ！？
言っとくけど、お礼なら要らないわ。
そんな大それたことをしてるわけじゃないもの――」

「そっ、そうじゃなくて！！」

「？」

いきなり大声を出すハク。
ここへきてようやく、赤い女の腕の力が弱まり、二人の歩みが止まる。
はーはー、と深呼吸をした後、ハクは言う。
「こっち…………逆方向です、私の家と……………」
「…………、」
強引な赤い女は、ふと周囲を見回す。
それから明らかに無理のある苦笑いを浮かべて、
「…………あははー、まー、そんな事もあるわよねー」
と言った。

☆007

…………………

「ここね？
アンタの家ってのは」

結局、ハクは赤い女性に強引に家まで拉致され……もとい、付き添われてしまった。
何処にでもあるような木造二階建ての古びたアパート。
所々カビで腐食した木板は今にも穴が開きそうだし、手すりや階段の金属部分は赤茶色に錆びていて危なっかしい。

「うわー、すっごいボロっちいわねー」

その家に住んでいる人間を目の前にして、更には真夜中だというのに大声で、女性は文句を言う。
思ったことはすぐ口に出す直情型の人間なのだろう。
言いたい事をなかなか言えないハクからすればその姿は対照的で、はっきり言って苦手なタイプだった。

「……あの、きっと大家さんにも聞こえてると思うんですけど……。
うちの大家さん、結構おっかないし………」

しかし、この手の人間が一度近付いて来たらなかなか離れてくれないことをハクは知っている。
故に直接的な反発の意志は示さず、あくまで「大家さんが」ということにして女性を説得しようとしたのだが……。

「ん、ああ、そんなの気にしない気にしない。
アタシ、大家の奴と部屋の間取りのこととか色々で大モメするのなんてしょっちゅうだし」

女性が大家と揉めていたとしてもそれはハクが住むアパートの方の大家さんには関係の無い事だし、
そもそも部屋の間取りが気に入らないというのは契約するときに自分がその部屋で良いと言ったからなのであって
大家と揉めれば解決するという問題でもないはず。
……などなどの疑問句一切合切を喉の奥にごっくんと流し込んで黙るハク。

（……悪い人じゃぁない、よね……？
実際、もし付き添ってくれてなかったら私は今もあの道路で泣き続けてただろうし……）

最初の内はただのお節介だと思っていたハクも、無事に自分を送り届けてくれたことでわずかながら心を開いたのか、
目の前の女性に感謝の念を感じるようになっていた。

「あ、あのっ……わざわざ家まで付いてきてくれて、どうもありがとうございましたっ！」

丁寧にお辞儀まで付けてお礼をするハク。

赤い女はその様子を見て、まさに頭の上に「?」マークが浮かび上がらんばかりのきょとんとした表情で。

「へ?
何言ってんの?
アタシこれからアンタの家にお邪魔しようかと思ってたんだけど?」
言った。

さもそれが当然のように憮然と平然と。
先ほどとは正反対にきょとんとしたような唖然としたような顔になるハク。
そんな事はお構い無しに女性は続ける。
相も変わらずマイペースを貫き通す女だ。
ベニヤ板くらいなら一万枚以上重ねたとしても容易く貫通するだろう。

「だってもう終電なくなっちゃったし、近くにコレといった知り合いもいないし」

「えぇ~~~~っっ!!!????」

喋るのを止めない女性に、さすがのハクも驚き大声を出す。
いきなりのことに耳を押さえる赤い女性。

「あいたっ……!
び、びっくりした~ぁ、アンタ案外おっきい声出せるのね~。
……って、いきなり大声出さないでよもうっ、今何時だと思ってんの?!
一時よ一時、皆とっくにお布団の中で眠ってる時間だってーの!」

確かにハクの左腕にある飾り気の無い簡素な腕時計は一時十分過ぎを指し示していた。
この時間ではもう走っている電車は回送電車くらいのものだろう。
そしてそんな夜中に大声を出すというのは近所迷惑な行為であり少々いただけない。
だがしかし、それにしてもだ。
一体何処をどのように解釈すればさっき街中で会ったばかりの人間の家に泊まるのが当然という発想に行き着くのだろうか。

「ね、寝るところなんて何処にもないですって！」

「あぁ、布団の事なら全っ然心配要らないから。
アタシ畳さえあればモスクワだろうとグリーンランドだろうと大の字で爆睡できる自信あるし」

「凍死しますよ?!
寒くてガタガタブルブルですよ！？」

何故そんな極地を引っ張り合いに出してまで自分が健康体であることをアピールする必要があるのか。
ボケとも取れない訳の分からない事を言う女性にツッコミかどうかも分からない言葉で返すハク。

「いやっ、そういう問題ではなく！！」

「あっ、……まさか今日カレシとか家に来たりするわけ？
……あっちゃぁ、参ったなぁ～。
さすがに恋人同士の邪魔するわけにはいかないしな～……」

「か、かか……っ！？

そ、そんなの………、
（はっ、ここで『イエス』と答えておけばさすがにこの人も諦めてくれるはず……！！）
……そっ、そーなんです！
今日はちょっと私の恋人が――」

「やぁっぱり♪
ねぇねぇ、相手どんな人？
年上？年下？
何やってる人なの？
是非アタシのことも友だちとして紹介してよ～♪」

「――聞く耳無しですかあなた！？
邪魔するわけにはいかないとかさっき言ってたような気がするのですがそれは幻聴なのでしょうかッ？！？」

噛み合わないというかどこかの歯が欠けているというか、むしろ全く関係の無い空中でふわふわ浮きながら回転する会話の歯車に、ハクはまったくついていけない。
具体的に表現するならば一方的なマシンガントーク。
あらかじめステキなトラップが大量に仕掛けられた海岸から占領地に無理矢理上陸しようとして特攻作戦を取らされる連合軍兵士の群れに、
止めを刺すように一斉掃射を仕掛けて蜂の巣にする某国製機関銃のような。
アパムくんが弾丸の補充を持ってきてくれるのを待つまでもなく敢え無く二階級特進して逝くハク軍の兵士達。
なんていういつか見た映画のワンシーンが脳内大シアターで上演されている間に、ハクはようやく気付く。
女性が、ハクの家の扉を開けて内部に進入しようとしていることに。

「――――って！！
いつの間に何をやってるんですかあなたはーーーっ！？！？」
「わっ、だから声大きいって！
それに、『いつの間に何を』って、質問は一つに絞りなさいよ！」
「あなたにだけは言われたくありませんっ！！」
これだけ大声で叫び続けていたら、近隣住民の一人や二人が何かしらのリアクションを取るはずなのだが、
依然として周囲は静かなままだった。
住民達は皆、激しい口論になって今にも刃物を取り出そうとしているような情景を想像したのかもしれない。
「いや、だってボケーっとしてるもんだからさ。
その間にバッグの中からそろ～、っとね」
「何を犯行声明じみたことを言っているんですか！！」
「やだなぁ、どこかのテロリストじゃあるまいし」
「窃盗は立派な犯罪ですッ！！！」
「大は小を…………」
「兼ねません！
これ以上何をやらかす気ですか！！」
「えっと、不法侵入、かな？」

「わかってるんならやるなっ、尋ねるな！！
……ってかえええーーーーっ！？！？」

「お邪魔しまーす♪」

ついに、赤い女はハクの家の中へと完全に潜り込んでしまった。
居住者の目の前での犯行。
これほど堂々とした不法侵入は犯罪史上でもかなり稀な部類に入るだろう。

「あ…………」

「わー、真っ暗ー。
電気のスイッチどこよー？」

ただただ立ち尽くすハク。
不思議と、笑みが零れてきた。
塩化シリカゲルを入れて密封された容器内の空気のような乾いた笑い、だが。

「はは…………、なんだかなぁ…………………」

笑いながら、ハクももう自分の家に帰ることにした。
未だに灯りを求めて暗闇をさまよう女性を横目に、ぱちん、とスイッチをオンにする。
にわかに人工の光に包まれる室内。
女性は眩しさで一瞬目をつぶりながら言う。

「お、明るくなった。

どこにあったの？」

「ふふ……すぐ入り口のところにあるじゃないですか」

「おー、ホントだ」

「あはは、案外おっちょこちょいなんですね」

「む……なんだかちょっぴり悔しいじゃないの」

「お互い様です。

こっちは目の前でみすみす不法侵入者を取り逃しちゃったわけですから」

「むむ、それも一理あるわね」

それとなく、談笑を始める二人。

☆008

「……でね！
そのヒロインが別れ際に言った一言がもうホンット女のアタシでも痺れるようなカッコイイセリフだったのよ！」

女同士の会話というのは一度始まるとなかなか終わらない。
幾度も流れを変え分岐したりして、今は昔見た名作ドラマの話という議題だった。
相当熱が入っているのか、どちらもかなりテンションが高い。

「えーっ、なんて言ったんですか？！」

「今から実演してあげるからしっかり見てなさいよーっ？
男に背中を見せて歩き去ってしまう……と見せかけて途中で半分だけ振り返る！
そして言うのよ！
……『アンタが逃した魚は……人魚やで』ってね！！」

「うわーっ、恥ずかしい〜〜っ！！
それ現実世界じゃ絶対使いませんよ〜っ！」

「そこがまた良いのよ！
ヒロインに感情移入しやすかったたっていうのもあるわね、アタシも当時はあの女優さんに憧れて俳優目指そうか！って思ったくらい！」

あははは……と大声で笑い転げるハク。
それを見た女性はむすっと膨れて「本気だったのよー」と言う。

と、ハクは何かに気付いたようだった。
床に転がっていた体をのそのそと起き上がらせて、少し声のトーンを落として、控えめに尋ねる。

「そういえば……私、まだあなたの名前も聞いてませんでしたね……。
なんてお呼びすれば？」

「っへ？」

尋ねるなり、あれだけ騒がしかったはずの女性はぴたりと言葉を止めた。
それと同時に、ハクの方も言葉をつなげることが出来なくなってしまう。
全くの無音。
そこはまるで密閉された真空容器内だった。
いち、にい、さん…………………数秒たってからやっと、ハクは眉を八の字にして焦り始めた。
拙いことを聞いてしまったのではないか？と思ったのである。
目の前の女性がまさか、名前を公にしてはいけないような裏社会系の人間だとは思っていなかったが、しかしそれなら、女性は何故自分の名前を尋ねられただけでこんなにも長く重い沈黙を室内に充満させているのか？
そこでハクははっとする。
ああ、きっとこの人は自分と面識があるのだ、と。
ハク自身は覚えていないが、どこかの仕事先で出会ったことがあるのかもしれない。
飲み会に誘われ一緒に飲んでいたは良いが途中でハクだけ酔いつぶれてしまい、その日の記憶を失って…………。
という事は容易に想像できた。

だとすれば、相手の名前を覚えていないことは大変な失礼に当たる。
それも家まで付き添って送ってくれた相手だ。
ハクはぶんぶんと手のひらを胸の前で振り回し、慌てて弁解を図った。

「あっ、もしかして私達、どこかでお会いしたことありましたっけっ？
飲み会のときだとホラ、私お酒に弱くて……忘れちゃってることとか良くあるんです、それで……。
………？」

室内はそこでもう一度沈黙する。
女性の様子がおかしい。
名前を覚えていないことに対して不満を垂れてむくれるならまだしも、沈黙。
女性の顔が、だんだん曇っていくのが分かった。
うつむき加減になって、何故かハクの住まいである四畳一間の床をじっと見ていた。

「そっ…………か。
そう、だよね。もう十年も前のこと、だもんね………」

その姿勢のまま、女性は独り言の様にポツリと呟く。
彼女の様子はどこか悲しげで、ハクはそれを見てただただ動揺するしかなかった。
しかし女性の方は何かを納得したのか、おもむろに頭を上げると、はっきりとした口調で話し始めた。
彼女の独白を聞いて、ハクは更に驚く。

「うん、それじゃあ改めて自己紹介するわ。

私の名前はメイコ。
歌手をやってるわ」

「メイコ……歌手……！？
って、あの咲音メイコさんですよね、アイドルの？！」

「まあ……一応ね」

「そっ、そんな有名な人とは知らなくて……その、ごめんなさい」

「良いのよ、名乗らなかった私が……悪い、んだから」

謝罪するハクに対して、女性はまたも悲しげにうつむく。
……名前を知られていなかったのが、そんなにショックだったのだろうか？
有名人の驕りのような気持ちがあるのだろうか？
などとハクは推測したが、どうもそれらとはまた違う気がした。
とにかく、自分はこの人――咲音メイコに対して悪いことをしてしまったのだ。

「あの……咲音さん。
お名前を知らなかったことは、謝ります……。
ですから、どうか気を落とさないで下さい……」

ハクはもう一度謝罪する。
けれどもメイコの様子は一向に変化を見せない。
やはり、どこか中空を眺めたまま物思いにふけっている。
ぼう、っとしたまま、彼女はハクに問い掛ける。

「……ホントに忘れちゃったの？」

忘れた、とは一体どういうことだろうか。
名前を忘れていた、とはまた別の、もっともっと重要な何かがあるような気がしてならなかった。
しかし次の一言でようやく、ハクは自分が何を忘れていたのかを知らされることになる。

「また『めーちゃん』って呼んでよ……。
――『ハク』」

☆009

……………………

覚えてるかな。
もう十年も前のこと。
覚えてるかな。
まだ私達がセーラー服を着てたときのこと。
覚えてるかな？
……私とあなたが出会ったときのこと。

「……………、」

私は覚えてるわよ。
あの時も今も、ハクはあんまり変わってないわね。

「そう……なんですか？」

そうよ。
十年前も、ハクは歌が大好きだった。

「……今は」

歌、好きじゃないの？

「……好き、じゃ、ないです。
なんでこんな仕事に就いたんだろう、って、ずっと思って」

うそ。
だって……私を歌わせてくれたのは。
私に歌をくれたのは、あなたなんだから。

☆010

……………

「無ぃ……」

探し物をしていた。
私の大切なもの。
大切だから、大事にしてるから、なくすはずは無いのに。

「どこにも無いよぉ……っ」

あれがなくなったら、私は多分、気がおかしくなってしまうだろう。
この世界で、私が唯一好きと言えるもの。
一人ぼっちの私に、希望を与えてくれるもの。

「どこかで落としたのかな……職員室、行ってみようかな……」

希望を失うのが怖くて、一人ぼっちになるのが嫌で、私は必死に探した。
教室中を何度も何度も探した。
探しても探しても、結局見つからなかった。
そのとき私は、本当に一人ぼっちだった。

……………

ハクは昔のことを思い出していた。
記憶のネットワークをたどってみれば、なるほど、確かに記憶があった。
まだ学生だった頃、友達作りも忘れて作曲に没頭していた自分の姿が。

「……そういえば、そんな事もありましたね。
確かにあの時私は、なくしてしまった楽譜を必死で探していました。
でも……それは昔のことです」

「いいえ、あなたは今でも歌が好きなのよ。
私には分かる」

「……なんで、そう言い切れるんですか」

「私はずっと、あなたのそばにいたからよ」

「え…………？」

ハクは一瞬思考が停止したのを自覚した。
いくら昔のこととはいえ、ずっと一緒だった人間をそうそう忘れてしまうものなのだろうか？
こればかりは酒に酔って忘れたなどという説明がつくものではない。
困惑するハクをよそに、メイコは話を続ける。

☆011

……………………

「……ふん」

クラスメイト――――というか、ただ単に授業を受ける教室が一緒になっただけの他人――――が、自分の鞄やら机やらを熱心に漁っていた。

私はその女子を横目でちらちらちらと見ながら呆れていた。

「どしたのー？
なんか気になった？」

私の隣に居る友達が、首をかしげながら私の方を見てきた。
視線をその友達に戻す。

「なんでもないよ。
それより、もう終業のチャイム鳴ったんだし、そろそろ帰ろうよ」

そうだね、と言って自分の帰り支度をする私の友達。
私も自分の鞄を肩に提げて、出入り口へと向かう。

「無ぃ……どこにも無いよぉ……っ」

「…………、」

その女子は今にも泣き出しそうな顔をしながら、それでもまだ探し物をしていた。
彼女があまりにも熱心に探し物をしているのが少々気になったが……。
私には関係の無いことだと思い、教室を後にすることにした。

「…………ふぅ」

家についてベッドに寝転がる。
が、なんだかだるい。
軽音部に所属する私だが、最近はどうもうまくいかない。
私はただ純粋に歌が歌いたいだけなのに、周りがあれこれとやかましいのだ。
原因は単純。
部員同士のいざこざだ。
よくある話、一つの部活が二つ以上の派閥に分かれてしまっているのだ。
音楽性の違い、というやつだろうか。
そんなに相手のことが嫌いならほうっておけば良いのに、やたらと口を挟んできたがる。
おかげで、今度の学園祭で演奏する曲もまだ決まってない、というのが現在の状況だ。
はっきり言って最悪だ。

こんなやりづらいクラブなら、いっそ辞めてしまおうかとさえ思っている。
同じグループのメンバーには申し訳ないが、一人のほうがはるかに動きやすい。
それにしても、だ。

「……、」

それにしても気になるのは、放課後見かけたあの女子のことだった。あんなに熱心になって探しているんだ、きっと何かとても重要なものに違いない。
私も一緒になって探してやればよかっただろうか……？
いや、でも何も知らない赤の他人がそこまでするというのもどうかと思う。
やっぱり見逃しておいて正解だったのだろう、と自己解決させておくことにする。
今まで読んでいた雑誌を投げ出して、ごろごろとだらしなく寝転がる。

「……、」

気になる。

「……、」

気になる。

「……、」

気になる。

「……～～～っ」

……気になるっ！

「あーっ、なんなのよもう！」

溜まったイライラを、枕を叩きつけることで発散する。
が、それでもやはり気になるものは気になる。
一体何が私の中でひっかかっているんだろうか……。
……やっぱりだめだ。
私の性格上、一度注意が向いてしまったものに関してはどうしても首を突っ込まなければ気がすまない。
そうこうしているうちに、私はクローゼットの上着を羽織って玄関へと向かっていた。
目指す場所は学校。
何故だか、どうしてもそこにいかなければならない気がしていた。

☆012

………………………

「はぁ、はぁっ……」

日はもうすっかり暮れて、空には秋の星空が浮かび上がっている。
枯葉が舞う公園沿いの歩道の上を、私は走っていた。
何をそんなにあせっているのだろう？
私自身にも、それはさっぱり分からなかった。
思い出されるのは、今にも泣き出しそうな顔をしたあの女子のこと。
今でもまだ、学校の中を捜し歩いているんだろうか。
あんなに必死になるほど大切な、何かを。

「あれー？メイコじゃん、どうしたの？」

そう言って私を呼び止めるのは、同じクラスの女子、亞北ネルだった。（珍しい苗字である）
いつも携帯をいじくっているのが特徴だ。
今もまた、暗い夜道だと言うのに携帯を操作しながら歩いてたらしい。

「うわっ……」

足元の縁石につまづいて、派手に転んだ。

「～、あいたたた……」

「ばかねえ……ちゃんと見てないから」

仕方が無いので、手を貸してやることにする。
私の手を握ってよいしょ、と起き上がるネル。
土ぼこりをぽんぽんはたいてから、彼女は私に向き直った。

「んでメイコ、アンタこんな時間に一人で何してんの？」

もっともな疑問である。
このあたりは特に遊べる施設も無いので、何をしてるのかと聞かれるのはごく当たり前なわけで。
散歩と言ってごまかすのは簡単だったが、とりあえず本当のところを言ってみることにした。
のだが。

「学校。
友達……が、忘れ物しちゃってさ。
それを手伝いに行くことにしたって訳」

それを聴いた瞬間、亞北ネルは、何故だろう、ほんのわずかに、動揺したような気がした。
しかしそれも一瞬、携帯を落としたことに気が付いてやっぱー、と言いながらそれを慌てて拾い上げた。
さっきの動揺は何だったのだろう、と気にする間もなく、ネルは液晶画面を見ながらこう言った。

「んじゃあさメイコ、あたしもついていっていい？　ほら……夜の学校ってなんだか楽しそうじゃない！」

夜の学校なんて、暗いだけで大して楽しくも無いと思うんだが。

断る理由も特に無いので、私はその提案を受けることにした。

☆013

………………

「暗いねー……」

学校に到着してまず最初に放ったネルの一言がそれだった。
確かに、暗い。
日ごろ私達が通っている学校と言うものは、電気が消えただけでこんなにも重々しく、恐怖をあおる場所になるのだろうか。
開いていた扉から、そろりと校内に入る。
懐中電灯の用意などしてこなかったので、携帯電話のライトと非常等の明かりを頼りに行動することにする。
何故か途中、ネルは「分かれて別々に探したほうが良くない？」ということで、一人でさっさと何処かへ行ってしまった。
……まあ、最初から一人でも探すつもりだったのだし、別にコレで良いと言えばコレで良いのだが……。
べっ、別に怖いわけじゃないからね！
ただちょっとこう……寒気を感じると言うか背筋が冷たくなるというかそんな感覚があるだけよ！

「…………、」

……………バカらしい。
一体何に対して弁明しているんだ私は。
とにかく、あの少女を探すことにしよう。
今でもまだ校内に残っていると言う保証なんて、どこにも無かったが。

……………

「はぁ……すっかり暗くなっちゃったなぁ……」

誰も居なくなった音楽教室。
暗闇にあってなお黒く、重厚な存在感を示すピアノ。
不気味といわざるを得ない、著名な音楽家の肖像画たち。

それらが静かに見守る中、ハクはまだ楽譜の捜索を続けていた。

「帰りたい……うぅん、駄目。
見つけるまでは、まだ帰れないよ」

飲み込まれてしまいそうな暗闇で自分の存在を確認するために、ハクは独り言を言いながら捜索を続ける。
教室の中を見回す。
机の中をがさごそ探る。
楽譜を探すための行動は、いつしか孤独を忘れるための行動へと目的を変えようとしていた。
しかしそれでも、女の子が一人で夜の学校に残っているのだ。
不安なわけが無いし、怖くないわけが無かった。

「どこに……いっちゃったのかな」

探し続けるうちに疲れが溜まっていたのか、ハクは捜索をいったん中止して床に座り込んだ。
ひんやりとした感覚がお尻から全身に伝播する。
昼間の学校だって十分寒いが、夜になるとこんなにも冷たくなるんだな、とハクは思った。

「…………、」

考えているうちに、ハクはなんだか悲しくなってきた。
なぜ、自分は独りなのか、と。
その問いに答える者は誰も居ない。
答えを出すことすら躊躇われる自煩自藤。
無限の解を持つようで、一度解いてしまえば一つの価値観しか見出せなくなる矮小な憐律法定式。

……そんな思考がハクの脳内を巡り巡っていた、そのときだった。

こつん。

「…………！」

階下から足音がした。
こつん、こつん、こつん……。
足音は段々と近づいて……ハクのいる階まで上がってくる。
警備員か。
見つかれば怒られるだろうし、学校側にも連絡がいくかもしれない。
そうなれば……。
……見つかるわけにはいかない。
そう思い、ハクは身を強張らせてじっとしていた。
教室のドアの鍵は、金属の小さな錠をぶら下げるだけぶら下げておいて偽装してある。
まさか錠の掛かった（ように見える）部屋にまで侵入してくることは無いだろう。
だから足音はここを通り過ぎるはずだ、と予想していたハクは、

——こつん。

足音が音楽室の前で停止したことに、心臓が跳ねるほど驚いた。

（……見つかっちゃう！？）

その瞬間見つかったときの言い訳だとか自分がこれからどうなるのだとか楽譜は一体どこへいったのかとか色々な事を考えていたのだが……。
そんな思考がまとまって形となる前に、それは訪れた。

かちゃ、がらがらがら！

ぶら下げておいただけのダミーの錠が外された音、間髪入れずにドアが乱暴に開けられる音。

ハクはただただ、机の下で飛び出しそうになる心臓を抑えていることしかできなかった。

もうだめだ。

「キミ、こんなところで何をしているんだ」

体格の良い警備員が、怒った顔で自分にそんなセリフを言う。

そんな光景を想像して、怖がりで泣き虫のハクはもう涙を抑えられなかった。

「…………ふぇっ」

思わず、嗚咽が漏れた。

声を出せば見つかってしまうのは明らかだったが、そんなことですら今のハクにはもう考えられなくなっていた。

「…………！

誰かいるの？」

聞こえてきたのは女性の声。

発声練習をよく積んでいるのであろう透き通った高音が、無人に近い音楽室に響き渡る。

予想していた展開との食い違いに少々戸惑いながら、綺麗な声だな、とハクは思った。

それは日ごろから決して練成を欠かさないメイコの努力によるもの

である。

ガチャン！！

「……そこね！」

つかつかとせわしない動きでメイコはハクの隠れる机に近づく。
荒々しく机がどかされ、そこから尻餅をついて涙ぐむハクの姿が現れた。

「…………、」

「…………………っ、」

目が合った。
合ってしまった。
瞬間、全ての動きが止まった。
この一瞬、本当に、時を指し示す針ですらもがその仕事を忘れたことであろう。
何故か夜遅くの学校に留まってなにやら怪しげな行動を取る少女と。
夜遅くの学校に留まってなにやら怪しげな行動を取る少女の事を想って何故か自分まで学校に侵入した少女の出会い。
起こるはずの無かった出会いが突然起こって、不思議を感じないはずが無かった。
その不思議議が、時間の静止を招いたわけである。

「…………、（な、なんなんだろうこのヒト……）」

数瞬、いや、それ以上が経過して、ハクはなんだか気まずい雰囲気を感じ取り始めた。

何故自分が見つかったのか、それ以前に何故目の前のこの少女は自分を見つけに来たのか。
あいかわらず、目の前の少女は何も喋らない。
ハクの目をじっっっ、と見つめたまま、何も喋らない。
実はと言うと、ハクの目の前の少女――メイコは、こんなことを考えていた。

(良かった……やっと見つかってくれた……。
怖かった……私の想像以上に、夜の学校と言うものは怖かったわ……)

要約すると、あまりの感動に声も出ない、という状況だったのだ。
無論ハクには知る由も無かったのだが。
そんな事情を知らないハクは、咄嗟に思った。
何か話しかけなければ、なんだか永遠にこのまま見詰め合ってる気がする!と。
そう思ったハクは、何でもいいからとりあえず話しかけることにした。

「――あ、あのっ!」

のだが。

がばっ!!

「――!?!?!?」

目の前の少女に、いきなり抱きつかれた。
これでもかというくらい力強い両腕でホールドされた、完全なハグである。

同じ女同士なのに、なんだか心臓が飛び出しそうになるほど恥ずかしい気分になるハク。
抱きついた本人は今それどころではなく、お構いなしにぎゅうぎゅうとハクを抱きしめる。
ついでに、ハクとメイコの、甲乙付けがたい豊満な胸同士もぎゅぎゅぎゅぅ、っとぶつかりあう。

「――ぁ、あ、そこはダメぇ……っ！
……じゃ、なくって！
い、痛いです、痛い痛い！」

相当感度が良かったのだろう――いや、そんな話は置いておいて――ハクはようやく我を取り戻す。
訴えを聞き入れたのか、ハクを締め付ける力がほんの少し弱まった。
ほっ、としたのも束の間、ハクはもう一度メイコの行動に驚かされる事になる。

「――今まで何処に行ってたのよ、心配したじゃない！」

顔を両手でがし、と掴まれて正面を向かされまた目が合ったかと思えば、目の前の少女はハクの目をしっかりと見つめて（睨んで？）言った。
頭上に？マークを浮かべるハク。
それもそのはず、目の前の少女は会話すらまともに交わしたことが無いのだ。
そんな人間に『心配した』と言われてもピンとこないのは当たり前であって、ただただキョトンとした表情で見返すことしかハクにはできなかった。
メイコは実際には、『一人で怖かったじゃない、なんで直ぐ見つかる場所にいてくれないのよ！』と言いたかったのらしいのだが。

見詰め合ってからしばらくしてようやく、ハクはメイコの言葉の意味（真意ではないが）が理解できるようになった。
要するに、この少女は自分の身を案じて探しに来てくれたのだ、と。

「――ありが、とう」

「えっ？」

近くにいても聞き取りづらいほどの小声で、ハクは言った。
恥ずかしかった。
それ以上に、嬉しかった。
自分の事を想ってくれる人がいることが、独りではなかったことが、嬉しかった。
ハクはもう一度、はっきりと、自分の思いを目の前の少女にぶつける。

「ありがとう……探しに来てくれて。
本当に、あり、が、とう……」

伝えようとして、また、言葉は途切れ途切れになった。
瞳の奥からあふれ出る涙が、のどの奥から漏れ出る嗚咽が、言葉を遮ったのだ。
それでも伝わった。
感謝を意味する言葉は、確かにメイコに伝わった。

「……お礼を言われるほどのことじゃないわよ。
ただのお節介でここまで来ただけなんだから」

そう言って、メイコは微笑んだ。
抱き合い見詰め合う二人はそして……

がらがらがら。

「…………、」

「だれかいるのー?
……って、うわぁ…………」

その状況に飛び込んだ少女が一人に激しくヒかれる羽目になった。

☆014

…………………………

「あっははははは、おっかし〜ぃ！！」

「もうっ、だから誤解だってばっ」

夜の学校であることもかまわず笑い転げるネルと、それを弁解するメイコ、そして無言でただうつむく少女。
おかしな取り合わせの三人が、誰もいないはずの夜の音楽室で騒ぎあっていた。
どうやら今日は守衛がさぼっているか寝ているかしているらしい、どれだけ大声で話していても人がやってくる気配は無かった。

「くっくっく……まさかメイコにそんな趣味があったとはねえ〜」

「はあ……勝手に言ってなさい」

「…………（赤面）、」

…………………………

「あ、そうだ、これこれ」

メイコの言うとおり勝手にあれこれと話を進めた後、ネルは鞄の中から何枚かの紙束を取り出した。

「あ、それって……！？」

「じゃじゃ〜ん、これなーんだ」

そう、それはハクが必死になって探していた自作の楽譜だった。

ハクはそれが楽譜であることを認識すると、慌ててその楽譜をネルの手からひったくった。

あ、と短い声を上げるネルに、ハクは申し訳なさそうな顔をしてすみません、と謝る。

「だって……こんなの作ってるのって、なんだか恥ずかしいじゃないですか。

他人に見せられるような出来じゃないし、それに……」

などと、ハクは色々な言い訳を展開してみせる。

「……ま、別に良いけどさ。

それじゃ、探し物も見つかったことだし、あたしはもう帰るねー」

言って、そばに置いておいた鞄を拾い上げると、ネルは足早に教室を出、玄関口へと向かっていった。

夜の校舎を一人で歩くことに、何の違和感も無いのだろうか……と、メイコは感心する。

「……その、私もそろそろ帰りますね。
本当に……本当にありがとうございました」
深々と頭を下げて、ハクもその場を立ち去ろうとする。
そこで……。

がしっ！

「！？」

メイコはハクの腕を思いっきり掴んで彼女を引き止めた。
何事かと驚いてメイコのほうを振り返るハク。
メイコは笑って、

「一人で帰るのは危ないでしょ？
私が家まで付いてってあげる」

そう言った。

「ええっ！？そ、そんなの悪いですよ……。
結構です、私ひとりでも帰れますから……」

「何言ってんの。
あんたみたいな危なっかしいのがひとりでうろちょろしてたら、襲ってくださいと言ってるような物じゃないの。
あたしも付いていく。
それで良いわね？」

「でも……、」

「でももだってでも無ぃ！
とにかく、あたしに任せとけば良いの！」
「あぅ……、」
戸惑うハクのその腕を引っ張って、メイコはハクを教室の外へと連れて行く。

☆０１５（前書き）

※投稿する順番間違えてました。
改訂後のこちらが正しい１５話目です。
混乱するような文章打って申し訳ありませんでした。

☆015

…………………………………

「…………、」

「…………、」

こうなることはわかっていた。

一人で帰ることは諦めとりあえず家まで送ってもらうことにしたハクは、聞こえないように小さくため息をつく。

きまずい。

ここまでの道中何度かメイコから話しかけてくることはあったが、ハクから話しかけることは一度も無かった。

何を話して良いかわからないし、そもそも話す勇気がハクには無かった。

……こうなることがわかっていたから、一人で帰りたかったのに。

一人の帰り道は何も無くて退屈だが、何かに縛られることもない。
今までどおりが一番気楽なのだが、目の前の少女はそれをよしとはしていないようだ。
一人でいることの何がいけないというのだろうか。
そんなことを考えていたときのことだった。

「ねぇっ」

また、メイコが話しかけてきた。
いい加減にしてくれ。
ハクは心底そう思うようになっていた。
そこでふと、ハクは歩調を速める。

「あ……ちょっと？」

「…………」

すたすたすた。
まるでメイコなど最初からいなかったかのように、完全に存在を無視して、ハクは歩く。
がしっ。
ハクはメイコに肩を掴まれた。
そのままの勢いで体の向きを変えられ、ハクはまたメイコと向き合う事になる。
ばしっ。
その瞬間、ハクは自分の肩を掴む手を振り払った。
腕をはたかれて、メイコは一瞬面食らう。

「……え」

「いい加減にして下さい！
さっきから一体何なんですか、頼んでもいないのに勝手にやってきたかと思えば、今度は家まで送っていく？
冗談じゃありません、大きなお世話です！
……それともなんですか？
私、そんなに寂しそうに見えましたか？
寂しそうに見えたから、同情してるんですか？」

ハクは叩きつけるように言葉を並べていく。
そのどれもが攻撃的で、およそ思いやりのかけらも感じられない言葉だった。
いきなりハクの態度が豹変したことに、メイコは驚く。
あまりに急な出来事だったので、メイコは返す言葉すら見つけられずにただ戸惑うばかり。
あたふたしている間に、ハクはくるりと振り返る。

「ここまで付き合ってくれて、どうもありがとうございました！
……さようなら！」

言いたい事を全て言い終えたのだろうか、ハクはそれだけ告げて走り出してしまった。

「あ、待って……！」

声が届くよりも早く、ハクはメイコの視界から消え去ってしまう。
気づけば、メイコは夜の街路に一人、ぽつんと取り残されてしまっていた。
チカチカと頼りなく光る外灯を見つめながら。

「…………、」

なんとも言えない虚無感を感じながら。
メイコは考えていた。

☆016

……………………………………………………………………………………

……………

「はぁっ、はぁっ、はぁっ…………！」

全力疾走すること約数十秒。
ハクの体力は既に限界を迎えていた。

普段あまり運動しない彼女の体では、まあよく走れたものだといった所だろうか。
体のあちこちが軋んでいる感じがする。
足には妙な電流が流れていて、歩くたびに違和感を覚える。
肺が酸素を求めるが、供給されるのは車の排気ガスで濁った空気ばかり。
上手に息が出来ない。
それでもやっとメイコから十分な距離を取った事で、一応脳は安堵する。
だが、足りない。
安堵などという言葉では収拾の付かない感情が、ハクの脳内を走り

抜けていた。

「…………、」

荒い呼吸をなんとか沈めながら、ハクは考えていた。
……あのメイコという少女は、自分に何を伝えたかったのだろうか。
帰り道で交わした会話は他愛の無いものだった。
何か、特別な意味があったわけではない。
それでも何故か、彼女の話にはなんらかの意図があった、ように感じてしまう。
彼女はハクの無くした楽譜を一緒に探してくれた。
……何故？
彼女は一人で帰ると言っていたハクを（途中で振り払ったとはいえ）送り届けてくれた。
……どうして？
そんな事をしても、彼女には何の得も無いはずだ。
そうやってハクは損得勘定で物事を考える。
しかし、足りない。
どう計算しても、彼女がハクを心配する要素が見当たらない。

「…………、」

そこでハクは頭の中の数式全てにゼロを掛けた。
当然答えなど出る筈も無い。
だがそれで良かった。
わからないモノなら、わからないままでも構わない。
形式上でだけ全ての謎を明瞭化したハクは、自宅へと向かう事にした。
とある少女が見つけてくれた楽譜を手に。

☆017

……………………………………

「……え。

………………え……?」

次の日の朝のホームルーム。
ハクはとんでもないものを目にする事になった。

「今度の合唱コンクールで歌う曲は、なんとハクさんのオリジナル曲です!」

担任教師のその発言を受けて、にわかに教室の中がざわめき出す。
そしてあちらこちらから、好奇の目線や内緒話が聞こえ始める。
あまりの異常事態に、ハクは今の状況を理解する事ができなかった。
———何故、誰にも見せた事が無かった楽譜が、私だけの楽譜が、今晒されている?

「すごいじゃないあなた!」

「ハクって曲作れるんだな！」

やがてクラスメイトが自分の席から立ち上がり、ハクの席まで群がってきた。
誰も皆目をきらきらと輝かせて、純粋にハクの事を歓迎している。
ハクは一瞬でクラスメイトに取り囲まれた。
その中、教卓とハクの席とを繋ぐライン上に、昨日の金髪少女が現れる。

「やっぱ才能ある人ってすごいわよね！
私の目に狂いは無かったわ！」

誇らしげに、まるで自分の事かのように、ネルは語り始める。
その右手には、ハクだけが持っているはずの、彼女の楽譜が握られていた。
オリジナルの楽譜はハクの鞄の中。
どうやら彼女はコピーを取っていたらしい。
つまり、昨日自分がハクの楽譜を持っている事を知った上で、そして平然を装って、ハクに楽譜を渡したのだ。
それを理解したハクは、自分の頭の中が急速に沸騰していくのを感じた。
腕を振り上げたハクは、その勢いを全く殺す事無く、その鉄槌を机に叩きつける。
がたん！！という大きな音がした。

「――――なんて事してくれたんですか！！」

ハクの絶叫で、教室がしんと静まり返った。
周囲の大気が氷点下を割り込んだのに反して、ハクの心臓は灼熱の

液体をごうごうと流し続ける。

「あれは私の曲です！
私だけの曲なんです！！
他の誰にも見せるつもりはなかったし、誰に聞かせるつもりも無い！
返してください！
あれは私が作った、私だけの曲なんです！！！！」

ひとしきり叫び終わると、ハクは席から勢い良く立ち上がり、ネルの握っていた楽譜を奪い取った。
いや、彼女の言葉を尊重するならば、それは返還されたと表現した方が良いだろう。

「……あ、」

「……、」

ネルは何かを言おうとしていたのだが、余りの衝撃に言葉が出てこなくなった。
ハクは一瞬だけ振り返りネルの目を睨みつけると、そこからはもう何も言わずに教室から足早に立ち去った。

☆018

……………………………

がしゃん！！

ハクはフェンスを乱暴に掴み取る。
彼女は教室を抜け出した後、真っ先に屋上へと向かった。
立ち入ってはならない場所だと知っているし、ここに居る事が分かれば教師に指導される事も分かっていた。
彼女は一人になりたかった。
それは自ら孤独を選ぶ道であったが、少なくとも他人に見られるよりは遥かにましだった。
誰にも見られない場所にいたかった。

だが、そんな願いはすぐに、呆気無く打ち破られる。

「いた！
ハクだ！！」

扉が開く音がして、そこから一人の少女が現れた。
昨日おせっかいを焼きにきた、茶髪の少女だった。
ハクは振り返る事もしないまま、メイコに話し掛ける。

「……何しにきたんですか」

その口調は暗く、冷たく、重い。
ハクは続ける。

「あなたも最初から分かってたんでしょう。
楽譜を盗んだのはあなた達で、それを知ってて私に近付いた。
――あなた達は犯罪者だ！
人のものを勝手に盗んで、それを知ってて私を騙して、挙句の果てに私の曲を晒し者にした！！」

ハクの絶叫を聞いた後、メイコが口を開く。

「……ごめんなさい、と私が謝った所で、意味は無いわね。
直接本人に話をさせるわ」

メイコはドアの傍から離れると、その向こう側には金髪の少女が立っていた。
ネル。
楽譜を持ち去った犯人。

「……ごめんなさい」

屋上のスペースに立ち入るなり、彼女は深く深く頭を下げて謝罪した。

だが、それだけでハクの怒りが収まる訳が無い。
彼女はまだ振り返らない。

「でもっ！
アタシだって悪気があってやった訳じゃないよっ！
あれにはちゃんと訳があって――」

「だから何だって言うんですか！
悪気が無ければ罪にはならないんですか！？
全部許されるとでも言いたいんですか！？
私から私の歌を奪った事が、許されて良いんですか！？」

「そうじゃないよっ、そうじゃないけど！！
アタシなりに考えた結果が――！」

「言い訳なんか聞きたくありません！
私がどれだけ歌が好きかなのか、あなたには分からないんでしょう！」

気が付けばハクはネルと向き合って話をしていた。
お互いにお互いの主張をぶつけ合う形だった。
交わされる言葉の全てが相手の心に伝わる。
こんな話をしたのは、ハクにとってこれが初めての経験だった。
今まで他人との接触を嫌っていたハク。
初めて、『歌が好きだ』と自分で語った瞬間だった。

「――わかるよっ！！」

そして、ネルはハクの予想を超えた発言をした。
ハクは訝しげに眉を潜めて、ネルの目を見る。

「音楽の授業とか、すっごく楽しみにしてるの知ってるよ。授業中でも、ノートの代わりに新しい詩とか、楽譜とか書いてるの、見てるよ。
今度の合唱コンクールだって、誰か他の曲が選ばれそうになる度に、自分の楽譜に目を落とす事だって分かってたよ」

真っ直ぐな目だった。
嘘偽りの無い、本当の気持ちを伝えたい人間だけができる目だった。
そして彼女の言葉は全て真実だった。
今まで誰にも分からないように隠してきた、『歌が好きだ』という想い。
それを見破られて、ハクは言葉が出てこなくなった。

「なんでさっ！
アンタ、歌が好きなんでしょ！
堂々としてたら良いじゃない！
何をこそこそする必要があるのさ！
歌が好きなんでしょ！？
自分の作った曲は絶対良い曲なんだって、どこかでは絶対思ってるはずなんだよ！
現にクラスの皆だって、アンタの歌を選んでくれたじゃない！
胸張って良いんだよ、自慢したって構わないんだよ！
アンタの歌、絶対絶対最高だから！」

あまりの気迫に押されて、気付かぬ内にハクは後ずさりしていた。

「だ、だから、私の歌を勝手に使ったんですか。
大体、あなたが言っている事が真実だって証拠は、どこにも――――！」

「いいえ。
全て真実よ」
そこで、メイコが二人の間に割って入った。
彼女の目もまた真剣だ。
「私、あなたが必死になって楽譜を探していたのを見たの。
その後、家に帰ってからあなたの事が気になった。
いてもたってもいられなくなって、あなたの事を探しに行った。
どうしてだか分かる？」
「ど、どうして、って……？」
「私、ようやく気が付いたの。
私があなたを探していた理由を、今知ったの。
――ああ、私達、良い友達になれるな、って。
思ったの」
友達になる。
それはハクが予想だにしていなかった一言だった。
目をまん丸に見開いて、彼女はメイコの目を見る。
「友……達……？」
「そう。
友達よ。
ネルもさっき私に打ち明けてくれた。
あなたと友達になりたい、あなたが一人でいるのを見ているのはもう嫌だ、って」

――――ネルが、そんな事を？
ハクは思わずネルを見る。
ネルの目はどこまでも純粋だった。
ハクはその目を見て、『もう自分に逃げ場が無い事を悟った』。
彼女に残された選択肢は、たった一つ。

「……良いんですか、私なんかで……？
こんな奴なんですよ……私……私なんて……」

この時点で既に、ハクは自分の取るべき答えが見えていた。
後はもう、一歩踏み出すだけだ。
ここから歩み寄っていけば、ゴールはすぐそこだった。

「良いの。
他の誰でもない、あなたが良いのよ。
こんな理由じゃ、いけないかしら？」

気が付けば、メイコはもう後一歩という距離まで近付いていた。
そしてメイコの隣に並ぶようにして、ネルまでもがハクの目の前に立っていた。

「……こんな奴だなんて言わないでよ、それはアタシのセリフ。
理由なんてなんだって良い。
アタシは、アンタと友達になりたい。
……これじゃ駄目なのかな？」

友達。
ハクがずっと欲しがっていたもの。
どれだけ手を伸ばしても、絶対届かないと思っていたもの。

それが今、目の前に、すぐ手の届く所にある。
彼女はもう迷わなかった。
彼女は、人生で初めての、一番大切で一番勇気ある第一歩を踏み出した。

「よろしく……お願いします……っ！」

☆019

……………………………

「……そこから先は早かったわよね。
三人で色々な所へ行って、いっぱい遊んで、色々な事を経験して。
……あの時の合唱コンクールは、私達の最高の思い出だったよね」

気が付けば、ハクはその目から大粒の涙を流していた。

「なんで……なんで私、そんな大事な事忘れちゃってたんだろう……。

大切な思い出なのに……大切な思い出だった筈なのに……っ！！」

「……十年も前の話だもの。
それに、合唱コンクールが終わったすぐ後、結果発表も待たずにすぐ転校、だったもんね」

「……お父さんの仕事の都合だったんだ。
泣いて叫んで嫌がったのに、そんな事まで忘れてた……！」

泣き崩れるハクの肩に、メイコはそっと手を添える。
優しい手だった。

「時間の流れは人を変えてしまうわ。
でもあなたは変わらなかった。
私達と交わした約束を、今でもずっと守ってくれていた」

ぴくん、とハクの肩が動く。
ぼろぼろと涙を流しながら、彼女の震える唇は言葉を紡いだ。
メイコも、その言葉に乗り掛かる。

「「――――『ずっと歌を書き続けようね。
そしたらまた、皆で一緒に歌えるから』――――！」」

その瞬間だった。

ばたん！！
大きな音がして、ハクの家の扉が開いた。

「ハク！！」

そこに立っていたのは、長い金髪の女性だった。
『あの時』から実に十年の時間が経っている。
それでも、今度は彼女の姿を見間違えなかった。

「――――ネル！？」

そう。
彼女は『あの時』約束を交わした、亜北ネルその人だった。

「ど、どうしてここに……！？」

「小一時間程前、メイコから連絡があったのよ！
アンタが見つかった、って！」

彼女は汗だくになりながら、ハクの家の玄関口でへたり込んだ。
相当焦って走ってきたのだろう、その様子を見ればすぐにそれが分かった。

「……久しぶりだね。
アタシの事、まだ覚えてる？」

「……うん。
覚えてる、覚えてるよ……！」

「……よかったぁ。
もう忘れられたんじゃないかと思って焦ってたんだよ〜……。
あ、お邪魔しまーす」

そう言いながら、ネルはハクの家のリビングまでやってきた。
相変わらずというかなんというか、自分のペースで行動するタイプだった。
十年前から変わっていない姿を見て、ハクはなんだか口元が緩むのを感じた。

「アタシ、今はメイコのマネージャーやってんの。
……いやそれよりもさー、今日もミーティングが長引いちゃってさー。
本当はもっと早くに来たかったんだけど、こんな時間になってごめ

んねー？」

「ううん、全然構わないよ。
……ああ、でも時間が時間だから、あんまり騒いだりは出来ないかも」

「げっ！
騒げないの、ここ!?
それってアタシにアイデンティティ捨てろって事？！」

「そんな大袈裟な……ふふふっ」

「あはは！
確かにあんたから『騒ぐ』って行動奪ったら、何にも残らないかもね！」

「むっ！
それってどういう意味さー！」

☆020

――時の流れは無情だ。
それは全てを磨耗させて、流し去って、忘れさせてしまう。
人は時の流れに逆らうことは出来ない。
だからいつか必ず、全てを忘れ去ってしまうかもしれない。
だけど、彼女達は忘れなかった。
たった一つの約束を、決して忘れる事は無かった。
今ここに、十年越しの約束が果たされる。
それは、彼女達が必死に必死に守り抜いてきた、努力の結晶だった。

「ねえねえ！
今度の合唱コンクールの曲、これにしない！？」
にぎやかな教室。
少年少女達がある一つの曲を巡って議論していた。
「ああ、これすっごく良い曲だよな！

メイコさんが歌ってるこれ、あのハクさんがプロデュースしてるやつだろ？
ええと、名前なんていったっけ？」
「もう、忘れないでよ！
この歌のタイトルは――――！」

彼女達の約束は、ずっとずっと……。

～ＦＩＮ～

あとがき

こんにちわ、作者のＡｒｃと申します。
この度は私の拙作を読んで頂き、まことにありがとうございました。

この小説のテーマは『パロディ』と『盗作』です。
ネタというものは生ものです。
そしてどんどんその数を減らしていく絶滅危惧種でもあります。
出来るだけ新鮮なものを見つけ出して、出来るだけ素早く捌いていかないといけないものです。

タイトルからして「ああ、この人はネタに詰まったんだな」と連想させるこの小説。
観客を楽しませる為のパロディは必要か？
どこからどこまでがその範疇か？
そもそもパロディとは何か？

劇を見た観客の、解釈の仕方は人それぞれ十人十色。
ならば各々の解釈を活用した二次創作とは本来（原作を侵害しない範囲での、また商売に用いられなければ）自由であるべきもの。
よってパロディとは利益としてその存在を容認された必要悪でもあるという事。
私はそんな風に考えています。

盗作、とはまた違いますが、物語の途中でネルはハクの楽譜を勝手に使用しましたよね。
あと、序盤でカイトが歌っていたのは、最初はある曲を替え歌にしようとしていました。
盗作は原作者の利権を侵害する行為です。

パロディと盗作を履き違えると、その先に待っているのは断罪です。

私のそんな下らない理論展開はさておき。

皆様はこの『弱音ハクの憂鬱』をお読みになられて、どんな感想を抱かれましたでしょうか。

文章がつたないぃ？
ミクを出せミクを？
キャラが崩壊してる？
兄さんの出番が少ないぃ？
何処かで聞いたような話だ？

なるほどなるほど。
一理あるどころの話ではございませんな。
しかし、それらの文章はたった一言で言い表せてしまうのです。

そう、『ツマンネ』であると！
敢えて言おう、ツマンネであると！
大事な事だからもう一回言っておこう、ツマンネであると！

ご意見・ご感想・ご指摘いつでもお待ちしております。
何か一言でも、そう、たとえ「ツマンネ」の一言でも構いません。
それが、クリエイターとしての私に力を与えてくれます。

弱音ハク、そしてボーカロイドの皆の幸福を祈りつつ。
ここであうぇいふろむきーぼーどを行いたいと思います。

俺……これが終わったらオリジナルのファンタジー小説投稿するんだ……

PDF小説ネット発足にあたって

　PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5796m/

弱音ハクの憂鬱

2010年10月10日23時52分発行